

西大寺小塔院の調査

—第624次・第627次

1 はじめに

孝謙太上天皇の発願により天平宝字8年(746)に建立された西大寺は、平城京右京一条三、四坊に31町という広大な寺域を有していた。現在、その多くが市街地化し、開発が相次いでいる。今回報告する平城第624・627次調査区は平城京右京一条三坊七坪に位置し、西大寺小塔院の想定位置である(図204)。付近では、食堂院(平城第404・410・415次、市15次等)、金堂院(平城第409・422・505・521次等)、小塔院の南に位置する四王院の四王堂周囲の防災工事にともなう調査(平城第174-25次)等がおこなわれているが、これまで小塔院周辺はほとんど調査がなされていなかった。(浦 蓉子・山崎有生)

2 第624次調査

調査の概要 本調査は、西大寺小坊町における共同住宅建設にともなう発掘調査である。工事にともなう掘削範囲のうち、掘削深度が遺構面に達する予定の地点について発掘調査を実施した。調査区は南北4m、東西12mで、調査期間は6月22日から6月24日である。

調査区北方の食堂院における調査では、食堂院東辺区画施設の西雨落溝に比定される溝を検出している(『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告書2007』)。当該地は西大寺食堂院の南に位置する小塔院の東辺にあたり、小塔院の東辺区画施設の西雨落溝が調査区内に入ることが想定された(図204)。

基本層序と検出遺構 基本層序は、地表から表土・攪乱土(20~40cm)、その下に部分的に耕作土・床土(10~20cm)があり、青灰色シルト(地山)となる。遺構検出は地山上面(標高72.4~72.5m)でおこなった。

調査区の東半で南北素掘溝SD1160を検出した(図205・206)。幅1.5m、深さは調査区北端で約0.8m、南端で約0.3mである。約4m分検出した。断面は逆台形状を呈する。南北の調査区外へ続くが、底面の高さから、溝は北流していたと考えられる。埋土は灰褐色~灰色の粘質土で、埋土中に土器片や瓦片を含む。最下層の粗砂層からは14世紀前半から15世紀前半頃の土器が出土してお

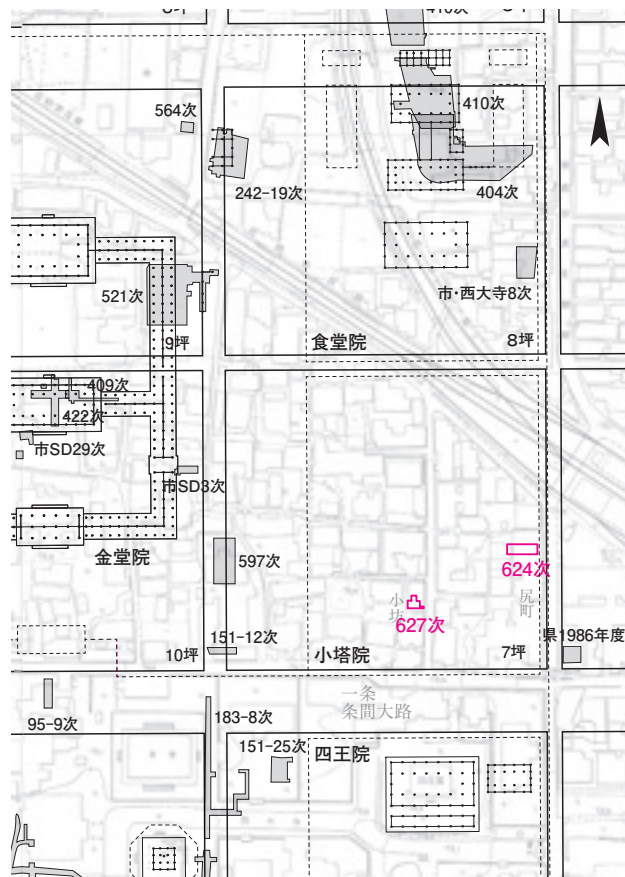


図204 第624・627次調査区位置図 1:3000

り、中世まで機能した溝と考えられる。(浦)

出土遺物 整理用コンテナ2箱分の土器が出土した。古代から近世までの土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶磁器等がある。南北溝SD1160の最下層からは土師器羽釜が、上層~中層からは土師器皿や羽釜、瓦質すり鉢や浅鉢等が出土した。いずれも14世紀前半から15世紀前半ごろに位置づけられる。(大澤正吾)

このほか、少量の瓦が出土した。

南北溝SD1160の評価について 平城第404・415次で検出した西大寺食堂院の東辺区画施設の西雨落溝を踏襲したと解釈できる溝は、数条が重複する。もっとも古い南北溝SD931は幅約3m、深さ約0.6mが残存する。溝心を $Y=-20.060.6$ ととらえ、これまでの西大寺伽藍の復元に用いられてきた平城京右京の条坊の振れ「北で $0^{\circ}19'50''$ 西偏、西で $0^{\circ}18'58''$ 」(『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書1990』『紀要2014』)によって南に延長させると、今回の調査区で検出した南北溝SD1160の溝心($Y=-20.059.7$)に一致する。



図205 南北溝SD1160完掘状況（南から）

このことから、南北溝SD1160は小塔院の東辺区画施設の西雨落溝を踏襲した溝である可能性が高いと考える。溝の最下層からは中世の遺物が出土していることから、古代の溝の位置を踏襲しつつ、中世まで機能した溝と考えられる。
(浦)

3 第627次調査

調査の概要 個人住宅建設にともなう事前の発掘調査で、調査地は西大寺小塔院の東西中軸付近にあたる（図204）。当初、南北3m、東西5mの調査区を設定したが、検出遺構が調査区外に延びることから拡張をおこなった。最終的な調査面積は約21㎡で、調査期間は8月4日から8月11日までである。

基本層序と検出遺構 地表から表土（約30cm）の下に、調査区中央では灰黄色シルトと明褐色細砂が互層となる層が、調査区西半では黄褐色細砂の層が広がる。古代にさかのぼる整地土とみられる。遺構検出はこれらの上面でおこなった。検出面の標高は73.2m前後である。これらの下層には遺物を含まない灰色のシルト層が広がる。

調査区の東端、および東方拡張区で南北大溝SD1180

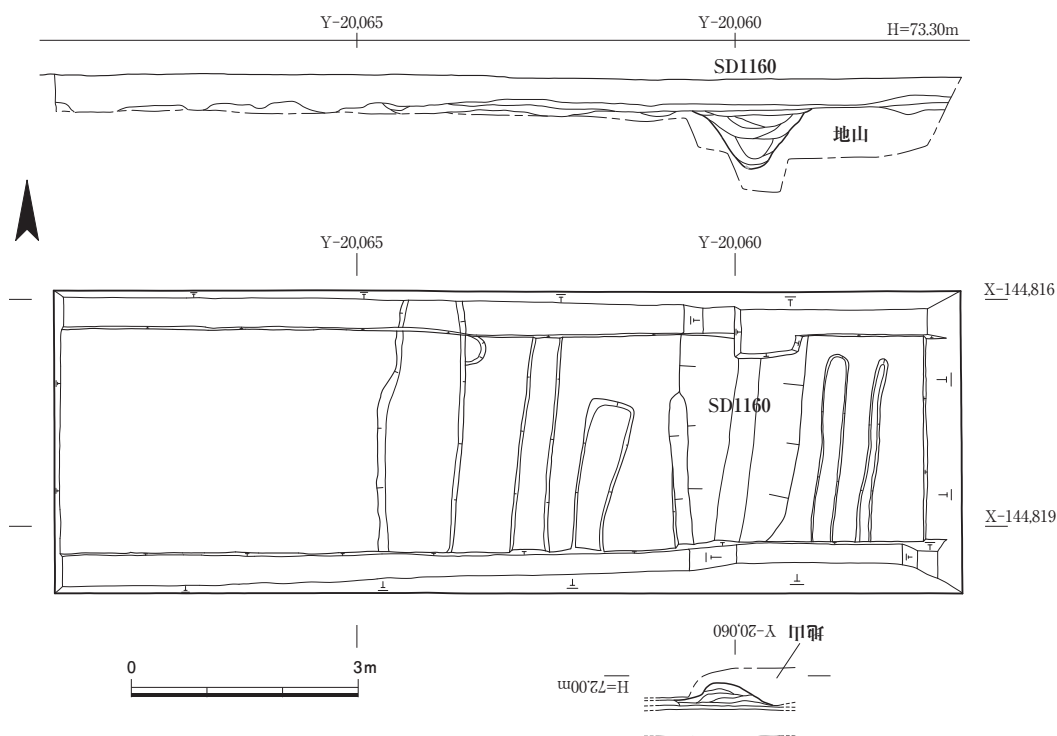


図206 第624次調査区遺構図・南北壁土層図 1:100

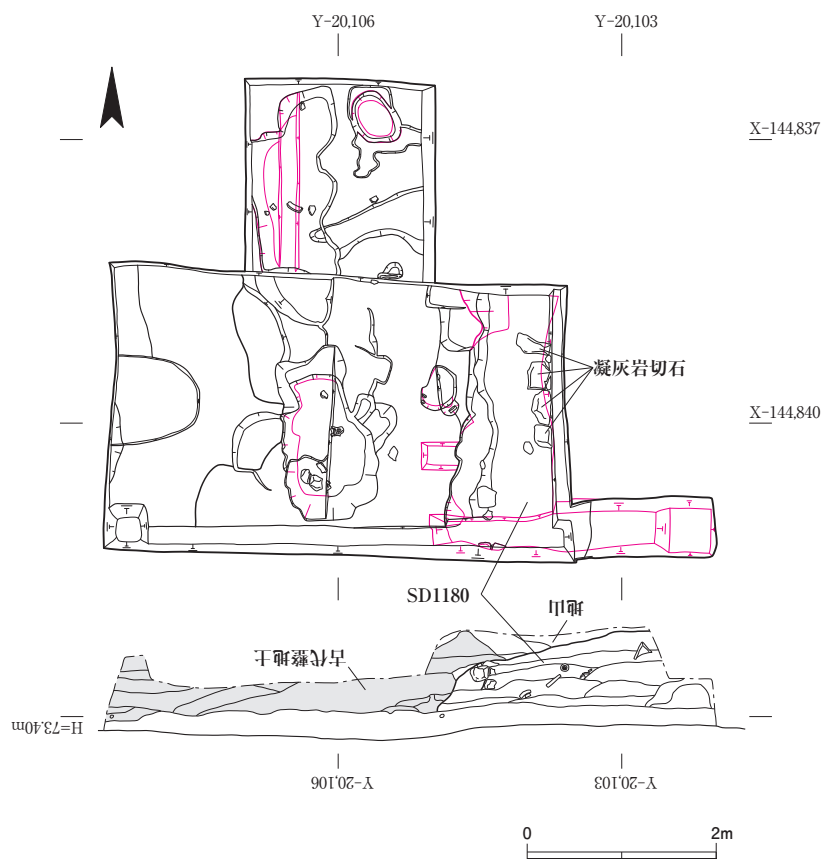


図207 第627次調査区遺構図・南壁土層図 1:80

を検出した(図207)。幅2.8m以上、確認できる深さは約70cm。南北3m分を検出した。東肩は検出できず、溝幅は不明である。溝底付近には、多量の瓦や凝灰岩4点が捨てられており、埋土には中世の瓦や中近世の土器を含み、埋土上層には炭粒が混じる。埋土の上部から下部にかけて出土した土器に大きな時期差がないことから、江戸時代前期まで存続し、一時に埋め立てられたとみられる。調査区南方の平城第174-25次ではこの溝に対応する遺構は検出していない。(山崎)

出土遺物 瓦磚類はSD1180を中心に出土した。軒丸瓦が22点、軒平瓦が8点出土したが、大部分が中・近世に属し、西大寺創建期では軒丸瓦6236Aが1点含まれ、緑釉磚の破片1点が認められたにとどまる。このほか、丸瓦301点(約59kg)、平瓦956点(約130kg)、凝灰岩切石等が出土した。(森先一貴)

土器は整理用コンテナで5箱分が出土した。そのうち3箱はSD1180からの出土である。室町時代から江戸時代前半の大和H型とI型の土釜、瓦質土器の火鉢、すり

鉢が多く、土師器皿と近世陶器を少量含む。1層から5層に分けて取り上げたが、相互に接合関係を確認し、大きな時期差は認められない。(神野 恵)

4 おわりに

第624次 西大寺小塔院の東辺区画施設の西雨落溝を踏襲したとみられる南北溝を検出した。

なお、当調査区の現地表面の標高は、周辺の既調査(平城第174-25・404・415・597次)の遺構面よりさらに20cm以上低い。そのため、小塔院の東辺に想定される区画施設自体を検出することはできなかったが、これまで調査が進んでいなかった西大寺小塔院についての知見を加えることができた。(浦)

第627次 中近世の南北大溝を検出した。江戸時代前期まで機能し、短期間で埋め立てられた様子がうかがえる。性格は不明だが、出土した瓦および凝灰岩切石の存在からは、近傍に古代・中世の西大寺に関わる遺構が存在した可能性も想定できる。(山崎)